

## マルクスのパリ時代の経済学研究に関する資料的覚書

重 田 晃 一

一

一九三二年にモスコウのマルクス・エンゲルス研究所によって刊行された『マルクス・エンゲルス全集』第一部第三卷（以下『全集』と略称する）は、第二部「抜萃ノートから（パリ、一八四四年初頭—一八四五年初頭）」の一部として、「経済学研究（抜萃）」という標題の浩瀚なノートを収録している。<sup>(1)</sup>それはマルクスがパリ滞在中に書きとめた経済学の抜萃ノートの現存する主要な部分をはじめて公けにしたものであって、マルクスの最初の本格的な経済学研究の面影を直接に伝える資料として、ほぼ同じ頃このノートの主要な部分を利用しつつ執筆されたと考えられる『経済学・哲学手稿』（以下四四年『手稿』と略称する）と並んで、初期マルクスの経済思想に関心を有する研究者には絶対に見逃すことのできない貴重な資料である。

それは全部で九冊のノートからなる尨大なノートであるが、いまその全貌を『全集』第三卷の二つの目録を整理して紹介すると、<sup>(2)</sup>つぎのとおりである。

ノートⅠ——①セー『経済学概論』、②スカルベク『社会的富の理論』③セー『応用経済学全講』からの抜萃よりなっている。

ノートⅡ——①スミス『国富論』（仏訳）からの抜萃のみよりなっている。

ノートⅢ——①ルヴァースール『回想録』、②スミス『国富論』（仏訳）からの抜萃よりなっている。

ノートⅣ——①クセノフォンの著作（「スパルタ人の国制」、「アテナイ人の国制」「アテナイ人の国家収入」「家政術」）（独訳）、②リカードゥ『経済学と課税の原理』（仏訳）、③ジェームズ・ミル『経済学綱要』（仏訳）からの抜萃よりなり、それに④エンゲルス『国民経済批判大綱』からの抜萃が添えられている。

ノートⅤ——①マカロック『経済学の起源、進歩、固有の対象および重要性に関する講義』（仏訳）、②デステュット・ドゥ・トラシイ『イデオロギー要論』、③ジェームズ・ミル『綱要』（仏訳）からの抜萃よりなっている。

ノートⅥ——①ローダーデル『公共の富の本性と原因に関する研究』（仏訳）からの抜萃のみよりなっている。

ノートⅦ——①シュッツ『国民経済学原理』、②リスト『政治経済学の国民的体系』、③オジャンダー『通商、産業および農業の利益に関する公衆の失望、あるいはリスト博士の工業力哲学の吟味——附論 ユートピアからの祈念』④同『諸国民の通商関係について』、⑤リカードゥ『原理』（仏訳）からの抜萃よりなっている。

ノートⅧ——①ボアギユベール『フランス詳論』、②同『富、貨幣および貢納の本性に関する論究』、③同『穀物の本性、耕作、商業および利益についての概論』、④ジョン・ロー『通貨および商業に関する諸考察』（仏訳）からの抜萃よりなっている。

ノートⅨ——ビュレ『イギリスとフランスの労働者階級の窮乏について』からの抜萃のみよりなっている。

ところで、これらのノートは——いまなお未公表の部分も含めて……『マルクス・エンゲルス遺稿』一部としてドイツ社会民主党の文庫に一括保管されていたが、後にアムステルダムの『社会史国際研究所』の所蔵するところとなり、以後今日に至るまで同所に保蔵されている。先年（一九五七年）研究所を訪ねられた杉原教授の調査されたところでは、分類の仕方に若干のちがいがみられるものの、『全集』が紹介したノート以外にはこの時代のノートは一つも見あたらなかったとのことである。<sup>(3)</sup>したがって、前記の『全集』の紹介はほぼ正確なものといつてよいだろう。

だが『全集』が紹介しているのは、あくまでも現存しているかぎりでのノートにかざられているのであって、ひとたび問題の視野をひろげると、なおそこにはいくつかの問題が浮び上ってくるはずである。すなわち、今日現存するノート以外に、なお別の経済学に関するノートの存在していたことが当然に予想されるし、事実、後にそのいくつかについて考察するように、その蓋然性はきわめて高いようにおもわれる。いわんや、文献の対象を社会思想関係の分野にまで拡張、ノートにその跡をとどめていなくとも、マルクス自身が目を通し研究した文献まで含めると、尨大な数にのぼるものと想定される。とすれば、パリ時代のマルクスの経済学研究的像を今日の時点で再構成しようとするばあい、もとより資料の性質からいって現存のノートが中軸におかれるべきであるが、それと並んで、右に触れたような諸文献についても一定の考慮が払われなくてはならない。なぜなら、そうすることによって、われわれは当時のマルクスの経済学研究の範囲をより正確に定めることができるばかりでなく、そのこと自身が、ときによっては全体の評価にも一定の影響をおよぼすかもしれないからである。また、ここで対象の範囲を社会思想の分野にまで拡張したのはつぎの理由にもとづく。

すでに別の機会にも述べたように、<sup>(4)</sup>かれの遺した拔萃ノートと評註とを検討してみると、それらの拔萃は、対象と

された理論の核心をめぐりに射抜いているという意味ではきわめて対象内在的であり客観的であるが、この内在は、同時に対象それ自体の展開から、この展開の必然的な帰結としてその前提（私的所有という前提）に对立・矛盾する帰結（私的所有の否定）を導き出そうという方法意識に終始貫かれているのであって、その意味ではまた、きわめて主体的な抜萃でもあった。このように、マルクスの経済学研究は、そのそもそもの出発点においてすでにきわめて批判的な研究であったわけである。そしてこの批判的態度、独自の方法意識の形成にあずかったものこそ、あのドイツ古典哲学の研究と初期社会主義思想の研究という二つの研究の流れにはかならない。ところでこれら二つの研究のうち、前者との系譜的な関連については、今日その大筋はほぼ明らかになっているものの、後者との関連については、研究はやっとその緒についたというのが研究史の率直な現状ではあるまいか。だとすれば、パリ時代のマルクスの経済学研究の周辺の情況の一つとして、これらの諸文献についての研究情況をもできうるかぎり精密に洗っておくのも、今日なお決して無意味な作業とはいえぬであらう。

ところで、わたくしはさきに、マルクスのパリ時代の『経済学ノート』の訳業に参加する機会を与えられ、その「訳者解説」でもパリ時代のマルクスの経済学研究の情況についていくらか言及しておいたけれども、紙数の制約もあって、遂に筆を上述の問題にまでのぼすことができなかった。以下、本稿は、この問題に関する旧来の研究成果に教えられつつ、これを資料的に整理してみたものである。これによってさきの「訳者解説」の不備の一端を補うとともに、今後のヨリ立ち入った研究の捨石の一つとしたい。

註(一) K. Marx, *Ökonomische Studien* (Exzerpte), Aus den Exzerpten (Paris, Anfang 1844—Anfang 1845), *Marx-Engels Gesamtausgabe* (MEGA) 第1巻第1分冊, Abt. I, Bd. 3, Berlin 1932, S. 435—583. なお杉原・重田共訳のマルク

ス『経済学ノート』（一九六二年、未来社刊）は右の部分の評註部分を全訳し、抜萃部分を抄訳したものである。

(2) Vgl. *MEGA*, Abt. I, Bd. 3, S. 411—416. 邦訳、八一二二ページ。なお、以下の抜萃ノートのうち、『全集』第三巻はロターデル、シュッツ、リスト、オジアンダー、ロー、ビュレ、クセノフォンからの部分は収録していない。それぞれのノートの作成の時期については、「訳者解説」の一七五—一八〇ページを参照のこと。

(3) 詳細は、杉原・重田訳『マルクス経済学ノート』の「訳者補説」二三—二五ページを参照のこと。

(4) 前掲書、「訳者解説」一八二—一八三ページ参照。

(5) 前掲「訳者解説」Ⅲの「1、パリ時代のマルクスと経済学の研究」と「2、『経済学ノート』の構成と作成の時期」をさす。

## 二

M・E・L研究所編『マルクス年譜』（以下『年譜』と略称する）は一八四四年三月頃—八月頃としてつぎのようにいつている。「マルクス、自分のフランス革命の研究とエンゲルスの論文「国民経済学批判大綱」とにとくに刺激されて、経済学の体系的研究に着手する。八月下旬頃までに、アダム・スミス、リカードゥ、J・B・セー、シスモンディ、ペクルル、ビュレ、さらにジュームズ・ミルの『綱要』、スカルベクの『理論』、シュルツの『生産の運動』、マカロックの『講義』、その他（イギリス人の著者のものはすべてフランス語で）を読み、部分的に評註と抜萃を作成する」。またその典拠として、『年譜』は『全集』第三巻四三—五五ページを指示している。<sup>(1)</sup>

右の『年譜』の叙述のうち、スミス、リカードゥ、セー、ビュレ、父ミル、スカルベク、マカロックに関しては、かれらからの抜萃ノートが現存しているのだから問題はない。また第四節の検討が明らかにするように、シュルツ、ペクルルに関しても、同様の抜萃ノートが存在していたと想定してもほぼ間違いはない。このようにして、問題は

のずからつぎの二点に絞られる。(一)シスモンディからの抜萃は果して作成されたのか、(二)「その他」の経済学の文献としてどのような種類の文献が考えられるのか？

本稿の註(1)でも述べたように、『年譜』はシスモンディからの抜萃が作成されたことについては、これといった典拠を示していない。あるいは、それは『全集』第三巻のノートVについてのつぎの紹介によったのかもしれない。ここでは「表題はつぎのとおりである」として、つぎのような記述がみられる。

「ギボン〔Gibbons〕。一八四四。

(一) マカロック。

(二) プレヴォのミル論。

(三) デステュット・ドゥ・トラシイ。

(四) ミル、シスモンディ・説明等 (Eclaircissements etc.)。ただしこの部分は抹殺されている。

(五) ベンサム『刑罰と報償の理論』。デュモン編、第三版、第二巻、パリ、一八二六年<sup>(2)</sup>。

ところが、前節でも紹介したように、ノートVは実際には、マカロック、トラシイ、父ミルからの抜萃よりなり、それにエンゲルスからの抜萃が添えられているにすぎない。シスモンディのばあい、もしそれからの抜萃が存在したとすれば、種々の事由から『経済学新原理』の抜萃であったと推定されるのだが、<sup>(3)</sup>それでは果してノートVの一部としてかつては『新原理』の抜萃が存在していたのが、やがて時の経過とともに散逸してしまったのであろうか？ たしかにそうおもわれるふしがある。以下そのような事実を想定せしめるようないくつかの資料を挙げてみると、つぎのとおりである。

(一) 『経済学・哲学手稿』はその第一手稿の「資本の利潤」の「四、資本の蓄積と資本家たちのあいだの競争」の項で、「リカードゥにとっては人間たちは無であり、生産物が一切である」といいつつ、これをリカードゥの『経済学と課税の原理』からの引用によって立証するとともに、リカードゥのこの見解にたいするシスモンディの批判を『経済学新原理』からの引用によって紹介している。<sup>(4)</sup>

(二) 右の(一)でのリカードゥからの引用は、リカードゥからの抜萃ノートにあり、それにつづく評註では引用のかたちではないが、シスモンディの右のリカードゥ批判の要旨が紹介されている。<sup>(5)</sup>

(三) 同じ手稿は第二手稿「私的所有の關係」での資本家の前近代的土地所有者との対立的發生について述べた箇所<sup>(6)</sup>で、前者にたいする批判者として、「重農主義者のベルガッス」などとともシスモンディの名を挙げている。<sup>(6)</sup>

(四) 『聖家族』(四四年九月—十一月執筆)の第四章の「4 プルードン」の「批判的傍註 第一」で、マルクスは市民的経済学の諸流派の対立は、一見きわめて本質的対立のようにみえるけれども結局、私的所有を前提とした上での部分的な対立にすぎぬことを述べて、さらにつきぎのようにいっている。「そのようにアダム・スミスはときおり資本家にたいし、デステュット・ドゥ・トラシは両替商にたいし、シモン・ドゥ・シスモンディは工場制度にたいし、リカードゥは土地所有にたいし、ほとんどすべての近代の経済学者は非工業的資本家にたいして論争する……」<sup>(7)</sup>(傍点<sup>(7)</sup>は重田)。

さて、右にあげた資料のうち、(三)と(四)とくに(四)によって、われわれは、マルクスがシスモンディの経済学史上の地位をかなり適確につかんでいたことを理解できる。また、マルクスが引用をするばあい、一般にノートに一度抜萃したものをそのまま利用することが多いが、その点で(一)と(二)の資料、とりわけ(一)でのシスモンディからの引用はわれわ

れの注意をひく。かくてわれわれは、右の諸事実からきわめて簡単に、シスモンディに関する抜萃ノートの存在を想定することが可能にみえるかもしれない。だが実は、四四年『手稿』の英訳者ミリガンも指摘しているように、シスモンディからの引用は、リカードゥからの引用とともにビュレの『イギリスとフランスの労働者階級の窮乏について』からの孫引である<sup>(8)</sup>。では当時のマルクスはビュレその他からシスモンディに関する知識をえたにすぎないのか？ だがなお考慮に値いするつぎの事実がある。

(五) ノートVの表題にしるされた著作の中で今日みあたらぬ抜萃に、いま一つベンサム『刑罰と報償の理論』からの抜萃がある。だがそのベンサムの著作に『聖家族』のマルクスは四箇所で言及し、その一箇所ではかなり長文の引用を添えている<sup>(9)</sup>。この事実は、すでに述べた引用をするばあいのマルクスの流儀とむすびつけて考えると、ベンサムの上述の著作からの抜萃が『聖家族』執筆の頃までに作成されていたことを強く推定させる。とすれば、ノートVの表紙に記されていないながら、しかも抜萃の今日に伝えられていない残りの一つであるシスモンディの『新原理』についても、同様のことを推測できないであろうか。

(六) 後にブリュッセル時代(四五年二月―四八年二月)にマルクスはシスモンディ研究にとりかかっているが、そのさいの抜き書きで今日に伝えられているのは、『経済学研究』全二巻からの抜萃だけである<sup>(10)</sup>。この時代のノートの目録も示すように、マルクスの経済学研究は、英語の文献が直接に読めるようになったこともあいまって、この時代になって一段と拡充され、深化している。だがそれにもかかわらず、シスモンディに関しては『研究』しかとりあげられた形跡の残っていないのは、果してなにを物語るのであろうか。

むろん、断定にはなお慎重な検討を要するけれども、われわれはこれまでに挙げた諸事実から、ビュレの著作その



他が機縁になって、ノートV作成に前後してシスモンディの『新原理』が読まれ、恐らく抜萃がつくられたとの推定を組立てることができないであらうか。

註(1) MEL研究所編、岡崎・渡辺訳『マルクス年譜』二九ページ。なお『年譜』の指示する『全集』第三卷四三五ページとは、『経済学研究』という文字のみが記された抜萃ノートの表紙の部分である。

(2) MEGA, Abt. I, Bd. 3, S. 411. 邦訳、九ページ。

なお邦訳の訳註に記されているように、「説明等」とは、シスモンディの『新原理』第二版の附録につけられた論文のことをさすようにおもわれる。

(3) 註(2)の推定や、——後にみるように——ブリュッセル時代にはシスモンディの『経済学研究』からの抜萃のみが作成されている事実などを考え合わせると、本文の推定がでてくる。

(4) Vgl., K. Marx, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte, aus dem Jahre 1844*, MEGA, Abt. I, Bd. 3, S. 63. 邦訳、(四四年『手稿』)の邦訳は数種あるが、以下、国民文庫版のページ数のみ示す)六九—七〇ページ。

(5) Vgl., ebenda, S. 514—515. 邦訳、五八—六〇ページ。

(6) Vgl., ebenda, S. 101. 邦訳、一二六—一二七ページ。

(7) *Marx-Engels Werke*, Bd. 2, S. 34. 邦訳、大月版『全集』第二卷(以下 *Werke* の邦訳ページ数はこの書のものを示す)三〇ページ。

(8) Vgl., K. Marx, *Economic and Philosophical Manuscripts of 1844*, Moscow, p. 49, footnote

ミリガンも指摘しているように、リカードウ、シスモンディからの引用文のみならず、その他の部分もビュレからの抜萃であって、念のためにビュレの原典と対照してみよう。ビュレでは「諸国民はただ生産の仕事場であり、人間は消費し生産するための一つの機械である。人間の生命は一つの資本である。——すべてが考量されあるいは計算される。そして経済法則は盲目的に世界を支配する」(p. 6) (傍点は重田)とあり、それへの註として「リカードウにとっては人間は無であり……」という一節とリカードウ、シスモンディからの引用とが添えられている。したがって、傍点の部分を除き、本文と註

マルクスのパリ時代の経済学研究に関する資料的覚書(重田)

の一部とを一つにあわせて、マルクスは『手稿』の本文に組み入れたのである。

(9) Vgl., *Marx-Engels Werke*, Bd. 2, S. 139—141, 189, 199, 205. 邦訳、一三七—一四〇、一八九、一九九、二〇五ページ。  
なお引用の添えられてゐるのは、S. 141 (一四〇ページ)である。

(10) Vgl., *MEGA*, Abt. I, Bd. 6, S. 614—615. なお、マルクス『経済学ノート』の「訳者解説」一九七一—一九八ページを参照。

### 三

さて、年譜が「……マカロックの『講義』その他を読み……」というばあい、この「その他」によってなにを指示しようとしていたかは必ずしも明らかでない。われわれはその一つとしてマルサスの『人口論』を想定するものであり、以下その基礎になる若干の資料を提出してみたい。

周知のように、エンゲルスが「国民経済学批判大綱」の中で批判を集中した対象の一つは、マルサスの人口法則であった。<sup>(1)</sup> 経済学の研究をはじめるにあたって「大綱」から「とくに刺戟された」といわれるマルクスが、その点を見落したとはとうてい考えられない。事実、『経済学・哲学手稿』は国民経済学の人口論にたいする短くはあるがきわめて鋭い批判を提起している。<sup>(2)</sup> だがそこでひきあいに出版されているのは父ミルであって、マルクスではなく、その点、本稿の主題にとっては余り役に立たない。このようにマルクスが直接マルサスに言及した資料はきわめて少ないが、それらの中から目ぼしいものを挙示してみると、つぎのとおりである。

(一) パリ時代のリカードゥ『原理』からの抜萃ノートのうち、地代論からの抜萃箇所の中で、マルクスは、「マルサスがリカードゥとミルとが着手した地代論を初めて提出した」、との評註を添えている。<sup>(3)</sup>

(二) マカロックの『経済学の起源、進歩、固有の対象および重要性に関する講義』からの抜萃の一部に、労賃の理論をマルサス人口論とむすびつけて説いた箇所が見られるが、すぐその後マルクスは、「この点、つまりマルサス理論の土台は、マカロック氏によって是認されている」、との評註を入れている。<sup>(4)</sup>

(三) ボアギューベル『富・貨幣および貢納の本質に関する論究』からの抜萃に添えられた評註の一部は、商品の一般的過剰生産を否認するセーと対比しつつマルサスによる過剰生産の肯定を指摘しているが、その中で、「人口すなわち人間の過剰生産を仮定するマルサス」、という評言がみえる。<sup>(5)</sup>

(四) 四四年『手稿』はその第三手稿の「欲望、生産および分業」の項の一節で、「国民経済学」内部でのせいたくを奨励して節約を呪詛する分派と節約を奨励してせいたくを呪詛する分派との対立に言及し、前者の立場の代表者としてローダーデルと並んで、マルサスの名を挙げている。<sup>(6)</sup>

(五) ルーゲ批判の論稿「論文『プロイセン国王と社会改革——プロイセン人』にたいする批判的論評」(四四年七月末執筆)の一節は、イギリス議会の救貧法についての見解——イギリスの極貧状態の主因としての救貧法——を痛烈に批判しつつ、この見解とワークハウスの設置との間にどのような関連があるかを指摘しているが、その中で、マルクスはマルサスの人口法則に言及してつぎの引用をおこなっている。「人口がたえず生活資料を上回る傾向にある以上、慈善は一つの愚行であり、貧困を公けに奨励することである。だから國家にできることは、貧困を成行にまかせて、せいぜい貧困者の死をたやすくさせることだけである」。<sup>(7)</sup>

さて、右の(一)~(四)の資料によって、われわれは、マルクスが人口法則をも含めてマルサスの経済学説にかなり通じていたことを容易に読みとれるであろう。(五)の資料に関していうと、その中の引用文が『人口論』第三篇第五、六、

七章の「救貧法について」や、第四篇でのその系論にあたる救貧法批判の部分と内容的にむすびついていることは明らかである。だがマルクスは引用の出所を示さず、『人口論』にもそのまま該当する文章は見出されない。<sup>(8)</sup> R・L・ミークは編著『マルクス・エンゲルス「マルサス論」』の中で「批判的論評」の一部を収録しているが、右の引用文に註して、「この引用文の最初の句についてはビュレの前掲書（『窮乏について』をさす―重田）第一巻一五二ページをみよ<sup>(9)</sup>」といている。

右のミークの指示する箇所は、ビュレ『窮乏について』の第一篇第五章（「イギリスにおける窮乏の存在と発展」）第二節「改正法（一八三四年の―重田）以後の窮乏」の一節であって、ミークの註が指摘している箇所をビュレの原典から引用すると、つぎのとおりである。

「ひとは、残酷だという非難をもつともしない勇氣をもって、マルサスによって指示された過激な薬を貧困状態にたいして厳格に適用してきた。すなわち、『各人はこの世界において、自他にたいして、つまりこの世にあまり多すぎる人々にたいしてそれがどんなに悪かろうとも、どれほどのことが請合えよう。もし餓えに叫ぶ人々のすべてにたいしてパンを与えたいとおもうなら、あまりに多くのことをしなければならぬだろう。それについて十分な富があるかどうか、いったい誰れが知っているだろう。人口にはたえず生存手段をこえる傾向があるので、慈善は狂気であり、貧困にたいして興えられる公的奨励である』。たしかに、われわれが説明しようとしている法則はこの理論を正当なものとは認めない。しかし、……」<sup>(10)</sup>（傍点は重田）。

なるほど、ミークの指摘するように、マルクスがその引用文の前半をビュレの右に引用した文章の傍点の部分から孫引した形跡はきわめて濃厚である。だがマルクスの引用文の後半の出所が明らかにされぬかぎり、問題はなお残さ

れているといわなくてはならない。とはいえ、以上の事実を考えると、(四)の資料によってただちにマルクスがマルサス『人口論』に直接触れていたことを立証するのは、少なくともきわめて困難であろう。だが、『剰余価値学説史』第三巻の中に見られるつぎの事実をこれまでに挙示した資料と重ね合わせて考えると、なおそこには考慮に値いする推定が生ずるようにおもわれる。

『剰余価値学説史』はその第三巻第十九章「トーマス・ロバート・マルサス」の第一四節で、マルサス『人口論』から三つのパラグラフを引用している。それは(一)イギリスの小屋住農に牝牛を恵与する計画に反対した部分、(二)「上層階級および下層階級は必要であるばかりでなく、そのうえきわめて有益である」ことを主張した部分、(三)上述の点についての将来の最高の期待——総人口の中で中産階級の人口数が増加し、プロレタリア階級が相対的にその数を減ずること——を述べた部分を『人口論』からぬきだしたものである。<sup>(11)</sup>マルクスが『剰余価値学説史』で『人口論』を利用するばあい——ただし第一巻では言及されていない——、かれは原則として英語原典の第一版もしくは第五版を利用している。ところが、右にあげた部分にかぎって、編輯者の手になる文献索引の註記によれば、かれは英語原典第五版をもとにプレヴォのおこなったフランス語訳改訂第三版(パリ一八三六年刊)を利用しているのである。<sup>(12)</sup>

ではなぜこの部分にかぎってマルクスはフランス語訳を利用したのか?文献索引その他によってもその理由は明らかでない。だが今日、少なくともつぎのことだけは明らかである。すなわち、ブリュッセル時代の経済学に関するノートも示すように、この時代になるとマルクスは英語の文献は英語原典で読みはじめている。<sup>(13)</sup>したがって、かれが『人口論』のフランス語訳——それも第五版の——を積極的に必要としたのはパリ時代にかぎられるようにおもわれる。またそれと並んで、われわれはつぎの事実注目しなくてはならない。同じ『剰余価値学説史』第三巻第二十章

「2 ジェームズ・ミル」は、『経済学綱要』から引用するはあい、英語原典と並んでフランス語訳を利用してゐる。しかも別の機会に考証しておいたように、種々の理由から推して、フランス語訳からの引用はすべてパリ時代の抜萃ノートを利用した形跡がきわめて濃厚である。だとすれば、『人口論』のフランス語訳からの引用のばあいにも同様のことが推定できないであろうか？ わたくしにはそのような想像が棄てきれないのである。

さて、『年譜』の「その他」の経済学者としてただちに想い浮ぶものにさらにケネーがある。A・コルニユの『カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルス』第二巻はこの点に触れて、つぎのようにいつている。「……この研究（パリ時代の経済学研究）は、ボアギユベールとケネーからはじまって、アダム・スミスとリカードゥをこえてジャン・バティスト・セーにまでおよぶ国民経済学の発展を包括している」<sup>(15)</sup>（カッコ内の挿入と傍点は重田）。

ここでコルニユがなにを根拠にケネーを数え入れたかは、必ずしもつまびらかでない。おもつに、かれは『経済学・哲学手稿』の第三手稿の中に見出されるただ一つの、だがきわめて注目すべきケネーへのあの言及<sup>(16)</sup>——重商主義、重農学派、古典派という経済学の歴史的展開と私的所有の主体的本質としての労働一般の析出との連繋の指摘——とむすびつけつつ、右の叙述をおこなったものと解される。たしかに『手稿』のこの箇所は、若きマルクスの経済思想に関心を抱くものにとつては看過すべからざる一論点であるけれども、スミスの『国富論』、マカロックの『講義』<sup>(17)</sup>をとおしてケネーにかなり通じていたとおもわれるマルクスにとつては、以上の経路をへて獲得した知識とかれ独自の方法とを結合することによって、案外容易に上述のケネー評価を導き出したのではあるかいか。事実、ブリュッセル時代の経済学に関する読書ノートは、この時代にケネーの「自然法」と「経済表」<sup>(18)</sup>とがデール編『重農主義者』第一部（パリ一八四六年）によって読まれたことを伝えている。したがって、コルニユの記述には、なお検討の余地が残されているとい

わなへつはなふらなご。

- 註 (1) 上の語句については、杉原四郎『ミルとマルクス』四六一—五三三ページを参照。
- (2) Vgl., K. Marx, *Manuskripte, MEGA, Abt. I, Bd. 3, S. 132, 135*. 邦訳「一七二—一七三」一七七ページ。なお父ミルに言及しているのは S. 132 (邦訳一七三ページ) を指している。
- (3) Vgl., *MEGA, Abt. I, Bd. 3, S. 499*. 邦訳「四九ページ」。
- (4) Vgl., ebenda, S. 552. 邦訳「二一八—二一九ページ」。
- (5) Vgl., ebenda., S. 578. 邦訳「一五五ページ」。
- (6) Vgl., K. Marx, *Manuskripte, MEGA, Abt. I, Bd. 3, S. 130*. 邦訳「一七〇ページ」。
- (7) *Marx-Engels Werke, Bd. 1, S. 398*. 邦訳「大月版『全集』第一巻「四三五ページ」。
- (8) 吉田秀夫訳『各版対照「マルサス」人口論』その他に於いて検索してみたが、遂に見出すことができなかった。
- (9) R. L. Meek (ed.), *Marx and Engels on Malthus*, London, 1953, p. 67. 邦訳「八〇ページ」。
- (10) E. Buret, *De la misères des classe laborieuses en Angleterre et en France*, Paris 1840, p. 152. なお、この引用文はマルサス『人口論』では見出されぬようになっている。
- (11) K. Marx, *Theorien über den Mehrwert*, 3 Teil., Berlin 1962, S. 57—58.
- (12) Vgl., ebenda, S. 550, 647—648.
- (13) Vgl., *MEGA, Abt. I, Bd. 6, S. 597—618*. なおマルクス『経済学ノート』の「訳者解説」一九七—二二一ページを参照。
- (14) 前掲訳書のミル『雑談』からの抜萃の邦訳のよう、訳註の中でのこの点の考証をしておいた。
- (15) A. Cornu, *Karl Marx und Friedrich Engels*, Bd. 2, Berlin 1962, S. 118.
- (16) Vgl., K. Marx, *Manuskripte, MEGA, Abt. I, Bd. 3, S. 109*. 邦訳「一三八ページ」。
- (17) Vgl., *MEGA, Abt. I, Bd. 3, S. 551*. 邦訳「一二七ページ」。
- (18) Vgl., *MEGA, Abt. I, Bd. 6, S. 612, 613*. なお「マルクス『経済学ノート』「訳者解説」二二〇ページ参照。

## 四

『経済学・哲学手稿』はその第一手稿の「労賃」と「資本利潤」の項で、シュルツ『生産の運動』（一八四三年刊）ビュレ『イギリスとフランスの労働者階級の窮乏について』（一八四〇年刊）、ペクール『社会のおよび政治的経済学の新理論』（一八四二年刊）からいくつかの引用をおこなっている。また「労賃」の項には、ルードンの『人口および生計の諸問題の解決』（一八四二年刊）からの引用が含まれている。<sup>(1)</sup>

さて、右の事實は、これをすでに言及したマルクスの引用の流儀にむすびつけて考えると、シュルツ、ペクール、ルードンからの抜萃が、その他の抜萃と並んで作成されていた——ビュレからの抜萃は現存するのだからその点では問題は存しない——ことをかなり確実に推測せしめる。『マルクス年譜』が、マルクスによって読まれ、かつ抜萃の作成された著作の中にシュルツ、ペクールの前述の著作を数え入れた——『年譜』はルードンの著作には言及していない——のも、恐らくは右の事實に依拠してのことであつたとおもわれる。

ところで、シュルツ、ビュレ、ペクール、ルードンからの抜萃が存在していたか否かについては、これ以上論ずべき資料はない。ただペクールの『新理論』を除くと、わたくしは最近それぞれの著作を参照する機会をえたので、マルクスによる引用部分その他について若干気付いたことを以下に記しておく。

一八四三年に刊行されたシュルツの『生産の運動』は、同時に「国家と社会の新科学の基礎づけに寄せての歴史的統計的研究」という副題をもつ総計一七九ページの書物であつて、必ずしも大部の著作とはいえない。それは「物質的生産』（S. 10—74）、『精神的生産——歴史的考察』（S. 75—121）、『精神的生産——統計的考察』（S. 122—176）の



三つの章からなり、冒頭に「序文」(S. 3-6)がおかれ、また末尾には「補遺と補正」(S. 179)が添えられている。ここに「精神的生産」とは、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』という精神的生産の語にほぼ照応するかに考えられ、いわゆる上部構造の諸問題が主として考察の対象にされている。したがって、この書物は『生産の運動』という主題から印象を受けるような単なる経済学の書物ではなく、経済生活からはじまって上部構造の問題をも含む、いわば人類の歴史的社会的発展の諸問題について論究した書物である。

さて、四四年『手稿』でのマルクスの引用についてこれを原典と対照してみると、まず、引用の範囲が最初の「物質的生産」の章にかぎられているのが注目される。『手稿』で強調されている箇所——印刷されたものではゲシュペルト——はすべて『生産の運動』でゲシュペルトの箇所である。<sup>(2)</sup> 換言すればマルクス自身がとくに強調するためにアランダラインを入れた箇所は存在しない。またマルクスは……などの記号で示すことなく無断で若干の文章を省略しているが、<sup>(3)</sup> このようなやり方はパリ時代の抜萃ノートに特に顕著に見られる事態であり、以上の事実は引用が抜萃ノートからの転用であるとの想定を、したがって抜萃ノートの存在という仮定をある程度傍証するようにおもわれる。シュルツの『生産の運動』がやや小型の著作であるのに比して、ビュレの『イギリスとフランスの労働者階級の窮乏について』は上下二巻にわかれ、上巻四四〇ページ(VIII, 422)、下巻四九七ページ(493a)、合計九三七ページに達する大著である。<sup>(4)</sup> マルクスはこのビュレの著作からパリ時代とブリュッセル時代との二回にわたって抜萃を作成している。『全集』第三巻の「抜萃された著作のリスト」<sup>(5)</sup> や後の考察がその一端を明らかにするように、パリ時代にはこれは第一巻から抜き書きをしているが、これに反して、ブリュッセル時代に関しては明確なことはわからない。<sup>(6)</sup> ただパリ時代の以上の事実と、『全集』第六巻の抜萃と評註についての簡単な紹介とからこの時代には第二巻に相当する

部分から抜き書きが作成されたものと推定される。

ところで、パリ時代の抜萃部分も、本稿第一節の註(2)で指摘しておいたように全集がこれを収録していないので、その詳細はたしかめえない。ただ四四年『手稿』の引用部分を原典と対照してみると、引用は主としてこの著作の序文から採られているものの(p. 6-7, 42-44, 49-50, 52-53, 62, 63, 68-69, 82)、第一巻の末尾に近い第二篇第二章からも引用されており(p. 363)、またすぐあとで触れるように、ルーゲ批判の論稿「批判的論評」でもマルクスはビュレのこの著作の他の箇所を若干利用しているから、抜萃はビュレの著作第一巻のかなり広範囲の部分に及んでいるものとおもわれる。

経済学史上の知識について、マルクスがビュレの『窮乏について』に若干負うところがあった点については、四四年『手稿』でのリカードゥ、シスモンディからの引用がビュレからの孫引であったこと、また「批判的論評」でのマルクスへの言及がビュレに依拠している疑いの濃いことなどから推察できよう。そのさいにも引証したミックは、さらに、同じ「批判的論評」でのケイ博士(サー・J・P・ケイ・シュットワース)の小冊子「イギリスにおける最近の教育振興策」への若干の言及と短い引用が、これまたビュレの『窮乏について』を利用したものであることを註記している。<sup>(7)</sup>またそこで詳述されているイギリスの貧民委員会に関する知識も、ミックも指摘しているように、ビュレの同じ著作から知識の供給を仰いだことはほぼ確実である。<sup>(8)(9)</sup>

一八四二年にパリで公刊されたルードンの『人口および生計の諸問題の解決』は、総計三三六ページにおよぶかなり大部の書物である。「一医師に提出された一連の書簡」という副題も示すように、それは特定の篇別構成によって構成された著作ではなく、それぞれ「パリ、一八四二年〇月〇日。親愛なる同僚」という書き出しではじまる合計十二通

の書簡を日付順に配列したという体裁をとっている。四四年『手稿』が言及し、一部引用しているのは、四月五日の日付を打たれた第十一書簡のうち、ローマとギリシアにおける売春にひきつづいてロンドンとパリにおけるそれを述べた箇所であって、『手稿』の引用は原文にきわめて忠実である。ただ引用文では一箇所強調を示す箇所——印刷されたものではゲシュペルト——があるけれども、<sup>(10)</sup>ルードンの原著には存在せず、マルクスによる強調を示すものと考えられる。

さて、ペクールに関していうと、たとえば「コンスタン・ペクールにおいては、初期フランス社会主義にあったいきいきとした独創的な精神がまったく消えうせている」<sup>(11)</sup>というガローディの評価と、「搾取説はサン・シモン主義者、並びにとりわけ今日ほとんど知られていないペクールによって非常に体系的に論じられている。かれはかれの同時代の社会主義の間でその思想の力と明晰さの点で傑出していた」<sup>(12)</sup>というツガン・バラノフスキーの評価との対立に端的に示されるように、なお今後の研究にまつところが多い。ビュレに関してもそうであって、かれの『窮乏について』とエンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』その他との関係についてはこれまで若干論じられてきたけれども、<sup>(13)</sup>前者とパリ時代のマルクスとの関係についてはほとんど究められていない。<sup>(14)</sup>だがこれまでに明らかにしたいくつかの考証からある程度推測されるように、当時のマルクスがビュレのこの著作から汲み取ったものは案外に多いのではあるまいか。コルニユは、四四年『手稿』での労賃の問題の検討にさいしてマルクスがビュレ、ペクールなどの「社会政策家や社会主義の様々な著作」に依拠していることに注目しているが、<sup>(15)</sup>今後の研究に示唆するところが多いようにおもわれる。

シュルツの『生産の運動』とパリ時代のマルクスとの関係については、わたくしの知るかぎり、これまで論じられ

たことがなかったが、この点に関しては、『マルクスとエンゲルス』第二巻でのコルニユの問題提起が注目に値する。かれが、エンゲルス、ヘスとパリ時代のマルクスとの間の思想的系譜を重視することは、今日ではもはや周知の事実に属する。第二巻でもこの点についてのかれの見解は基本的には変わっていないが、かれは、さらにシュルツとマルクスとの関係について新たに目を注ぎ、一段の前進をめざしている。すなわち、かれは『生産の運動』を貫くシュルツの基本的な歴史観、つまり「種々の歴史上の諸時代は欲求の発展と欲求満足の体制に依存し、後者が経済的、社会的関係の不断の発展をひきおこす」という歴史観を検討し、この検討の中から結論として、(一)「国家は社会のあるすでに発展した段階ではじめて生ずる」としたこと、(二)「分業の進展が国民の種々の階級的構成を、したがって社会と国家との種々の形態を、またそれと並んで法制の変化を規定する」としたこと、(三)「近代の大工業が新しい社会制度をうみだす」としたことにかれの歴史観の特色を見出し、この特色と四四年『手稿』における唯物史観の土台の設定との連続に注目を払っているが、<sup>(16)</sup>その結論はともかく、新しい問題の提起といわなくてはならない。

ともあれ、マルクスのパリ時代の経済学研究の全貌をつきとめようとするばあい、右にごく僅か関説したところからも推察されるように、パリ時代のマルクスとペクルル、ビュレ、シュルツなどとの関係にはなお今後の解明にまつべき論点が残されているようにおもわれ、四四年『手稿』での引用もいま一度そのような角度から検討されてよからう。

註(一) 参考までに原題名を記しておけば、<sup>(16)</sup> ちのとりである。

W. Schulz, *Die Bewegung der Production, Eine geschichtlich-statistische Abhandlung zur Grundlegung einer neuen Wissenschaft des Staats und der Gesellschaft*, Zürich und Winterthur 1843.

E. Buret, *De la miseres des classe laborieuses en Angleterre et en France*, De la nature de la misere, de son existence, de ses effets, de ses causes, et de l'insuffisance des remedes qu'on lui a opposes jusqu'ici; avec l'indication des moyens propres a en affranchir les societes, Paris 1840.

Ch. Pecqueur, *Theorie nouvelle d'economie sociale et politique*, ou etudes sur l'organisation des societes, Paris 1842.

Ch. Loudon, *Solution du probleme de la population et de la subsistance*, soumise a un medecin dans une serie de lettres, Paris 1842.

(2) たたし「箇所——「なまなま」その隔離した社会のなかでな……」(Schulz, a. a. O., S. 66, Marx, Manuskripte, MEGA, Abt. I, Bd. 3, S. 47.)——と傍点で示した部分がシュルツ原典のみケシュネルトで示されている。その他たまたま「シュルツ」では「勞賃」となっているのがマルクスによる引用では「勞賃」となっているような例が散見するが、それらは『全集』編輯者によってすべて指摘されている。なおシュルツのこの著作は一八四〇年代にはかなり注目された書物のようであつて、ケスも「貨幣的存在としての」の中で、ケシュネルツのこの書物に批判的に言及している。(M. Hess, Philosophische und sozialistische Schriften, Berlin 1961, S. 346—347.)

(3) これらの箇所は『全集』第三巻では、本文中で「……」を挿入するか欄外の脚注で示すかして、すべて指摘されている。そこで以下ではマルクス自身によって省略線が入れられて省略が明白に示されているが、文意を理解するためには省略部分を補った方がよいようにおもわれる箇所を若干復元してみると、つぎのとおりである。カッコに包んだ語句がマルクスによって省略された語句を示す。

- ① In den englischen Seidfabriken (befinden sich gleichfalls) viele Arbeiterinnen; (während) in den Wollefabriken, die größere Körperkraft erfordern, mehr Männer (angestellt sind.) (Schulz, a. a. O., S. 71—72. MEGA, Bd. 3, S. 48. 邦訳『四四一—二』)。
- ② Auch (läßt sich) schon hier und da (eine) engere Verbindung der Hauptzweige der Production unter sich (gewahren.) (Schulz, a. a. O., S. 40. MEGA, Bd. 3, S. 65. 邦訳『四三二—三』)。
- ③ (Besonders) in England, wo einzelne Fabrikherren mitunter an der Spitze von 10—12,000 Arbeitern (stehen,マルクスのパリ時代の経済学研究に関する資料的覚書(重田) 一六七

関西大学『経済論集』第十三巻第一、二号

一六八

kommen) schon solche Verbindungen verschiedener Produktionszweige unter einer leitenden Intelligenz, solche kleinere Staaten oder Provinzen im Staate, nicht selten (vor.) (Schulz, a. a. O., S. 40, MEGA, Bd. 3, S. 65. 邦訳『三ツペーン』)。

またシュルツでは「人口」とあるのがマルクスの引用では「社会」となっているようなケースが三つあるが、それらはすべて『全集』編輯者によって指摘されている。

- (4) いま少し補っておくと、ビュレのこの著作は四篇三十七章をもって構成され、第一、三、四篇は一〇章に、第二篇だけが七章にわけられている。第一巻には第二篇第四章までが収録され、以下が第二巻に宛てられている。第一篇「窮乏の本質、実存、および発展について」、第二篇「貧困階級の肉体的ならびに道徳的狀態」、第四篇「窮乏と闘いこれを除去するための手段について」となっており、第三篇には見出しはないが、窮乏の諸原因その他が述べられているようである。また第一巻の冒頭に六ページの「まえがき」と一〇〇ページにおよぶ「序論」とがおかれ、第二巻の巻末には二〇ページばかりの「結論」が添えられている。

(5) Vgl. MEGA, Abt. I, Bd. 3, S. 413. 邦訳『三ツペーン』。

(6) Vgl. MEGA, Abt. I, Bd., 6, S. 602—603. プリュッセル時代にマルクスが利用したのは註(1)の版ではなくて、著作集『経済学講義』(ブリュッセル、一八四三年)にブランキ『経済学史』と並んで収録されたものである。

(7) Vgl. R. L. Meek, a. a. O., p. 65. 邦訳『七ツペーン』。それはビュレの著作の第一巻四〇〇ページを中心にした箇所であって、第二篇第四章「下層階級の道徳的状況について」の一部をなす。

(8) Vgl. ebenda, p. 66. 邦訳七九ページ。ミックの指示しているのはビュレの著作の第一巻一五六—七ページ、および二三三ページであって、それらはそれぞれ、第二篇第一章(「イギリスにおける窮乏の存在と発展」)第二節「改正法(一八三四年の—重田)以後の窮乏」および第一篇第七章(「フランスにおける公的窮乏について」)第二節「フランスならびにイギリスにおける公的窮乏の相違に関する一論」の一部をなす。

(9) 以下参考までに、四四年『手稿』でのビュレからの抜萃の仕方の特徴について若干記しておこう。まず引用で強調されている箇所は、『全集』編輯者もそれぞれの箇所を註記しているように、すべてマルクス自身によるものである。また、つぎの箇所の文章はマルクス自身はビュレからの引用であることを明示していないが、すべてそうである。

- ① 「労働は一つの商品である。価格が高いとすれば、その商品は非常に需要されているのだし、価格が低いとすれば、その商品は非常に供給されているのである」(MEGA, Bd. 3, S. 50邦訳四七ページ。)この部分は『手稿』では引用であることが明示されていないが、そのままビュレの著作の四二ページに見出される。
- ② 「商品としては、労働はますます価格を低めなければならない。」①の文章につづくこの文章もビュレの著作の四三ページにそのまま見出される。なおこれにつづく文章もビュレの著作の四三ページの叙述の要約である。
- ③ 「自由な取引の自由な結果」(MEGA, Bd. 3, S. 50邦訳「四八ページ」)は、ビュレの著作五〇ページの「自由な取引の結果」を引用したものとおもわれる。
- ④ 「労働の価格と報酬とを同時に低める。それは労働者を完成し、人間を下落させる」(MEGA, Bd. 3, S. 50邦訳「四八ページ」)は、ビュレの著作五二ページから五三ページにかけての叙述の引用である。
- ⑩ Vgl. MEGA, Abt. I, Bd. 3, S. 50. 邦訳「四七ページ」。
- ⑪ ガローディ著平田清明訳『近代フランス社会思想史』、シネルヴァ書房刊、二一三ページ。
- ⑫ Tugan-Baranowsky, *Modern Socialism, in its Historical Development*, London 1910, p. 37. 安倍浩訳五六ページ。ただしガローディも、「エクルは、彼の道徳的観念のヴェールをとおしてのみ」という留保を強調しつつも、「剰余価値論の根拠をかすかに見とおした」(前掲訳書「二一五ページ」)ことを認めているのは、ツガンの評価と結びつけるとき、注目を要する。
- ⑬ この点についての関連文献その他に関しては、杉原四郎『ミルとマルクス』三九ページの註3での言及を参照せよ。
- ⑭ その点で、P. Chanson, *Eugène Buret 1810~1842, précurseur de la révolution nationale*, Paris 1943. は一資料をなすであろう。それは註の若干の箇所でマルクスとの関係に言及しているようであるが、時間の制約もあって、今回は参照しえなかつた。
- ⑮ A. Cornu, *Karl Marx und Friedrich Engels*, Bd. 2, Berlin 1962, S. 153.
- ⑯ Vgl. ebenda, S. 122—125, 126.

## 五

マルクスが社会主義・共産主義にたいして最初に公的に発言したのは、『ライン新聞』の論説「共産主義とアウグスブルク『アルゲマイネ・ツァイトゥンク』」（一八四二年十月十六日付、第二八九号）においてであったが、その一節でかれはつぎのようにいっている。『ライン新聞』は、今日の姿における共産主義思想にたいしては、理論的、現実性さえ認めておらず、したがってその実現はなおさら願っておらず、あるいはこれを可能とさえ考えることができないのであるから、これらの思想にたいして根本的な批判をくわえるであろう。しかしルルーやコンシデランの著書、とりわけブルードンの明敏な労作のような著書は、そのときどきの皮相な思いつきによってではなく、長期にわたる、深遠な研究のあとではじめてこれを批判することができるということは、アウグスブルク嬢といえども、……かならずさとしたはずである。……われわれはこの点で同紙と意見を異にするだけに、なおさら真剣に前記の理論的著作をとりあげなければならない。』<sup>(1)</sup>

さて、右の論説の言明からもうかがえるように、マルクスは最初は社会主義・共産主義思想にたいして批判的な意識をもってたちむかいながらも、やがて体験を積み重ね、研究の進むにしたがって、逆に社会主義者・共産主義者として変貌をとげてゆく。その間にこれらの問題に関するどの様な文献が涉獵され、またそれらがどのような順序で研究されたかについては、いまなおつまびらかでない。たとえば、パリ時代に先立つクロイツナハ時代をとりあげてみても、一方では各国の近代史と政治学の古典の研究が、他方ではヘーゲル法哲学の批判的検討がすすめられていたことはかなりの程度まで資料的にたしかめうるにもかかわらず、<sup>(2)</sup> 以上の問題については、資料的に直接これを跡づけえな



いのはきわめて遺憾である。

だが、今日「『独仏年誌』からの手紙」として公表されているマルクスの書簡を検討すれば、われわれはこの時代にこの問題の研究でかなりの深化があったことを、間接的にはある程度推定しうるであろう。それはもと「往復書簡、一八四三年」という標題でルーゲによって編輯公表されたマルクス、ルーゲ、バクトニン、フォイエルバッハの間の往復書簡計八通の中に含まれていたものであるが、<sup>(3)</sup>『年誌』の綱領問題を論議の軸としたこれらの書簡全体のしめくりとしてその最後におかれた一書簡の中で、マルクスは「世界を教条的に予想するのではなくて、古い世界の批判の中からはじめて新しい世界を見出す」という自己の原理を真正面に押し出すとともに、それとの対比において一方ではカベール、デザミ、ヴァイトリンク等の共産主義の、他方ではフリーエ、プルードン等の社会主義の一面性、抽象性を鋭く批判している。<sup>(4)</sup>われわれは本節の冒頭で引用した『ライン新聞』でのルルーなどへの言及とここでのカベールなどへの言及とを照合するとき、それをとおして四二年の秋から四三年にかけて社会主義・共産主義に関するどのような文献が涉獵されたかを、おぼろげながらも推測しうるであろう。

パリ時代におけるこの問題に関する研究状況については、たとえば向坂教授は、「またパリではカベール、デザミ、フリーエ、プルードン、オウエン、ペクル等フランス、イギリスの社会主義者、ヴァイトリンク等のドイツの社会主義者の思想にとりかかっている」、<sup>(5)</sup>とっておられる。教授がどのような根拠にもとづいてこのようにいわれたかは明らかでないが、デザミを除いてはすべて『経済学・哲学手稿』で言及されているから——そのデザミには『聖家族』で言及されている——<sup>(6)</sup>ほぼ首肯しうるだろう。ただオーエンについていうと、たしかに『手稿』は第三手稿の一箇所であれに言及しているし、<sup>(7)</sup>さらに『聖家族』ではその三箇所であれに言及している。<sup>(8)</sup>けれども、パリ時代

のマルクスはまだ英語の文献が読めなかったこと、後に英語のできるようになったブリュッセル時代にオーエンから大量の抜き書きを作成していることなどを考えあわせると、マルクスがパリ時代にオーエンの著作に直接触れていたかどうかについてはなお検討の余地が残されているのではあるまいか。<sup>(9)</sup><sup>(10)</sup>

ところで、四四年『手稿』はその序文の一節でつぎのようにいっている。「いうまでもないことだが、わたくしはフランスとイギリスの社会主義者たちのほかに、ドイツの社会主義的な著作をも利用した。とはいえ、この科学に関するかぎり、内容に富み、独創的なドイツ語の著作は結局——ヴァイトリンクの諸著作を別にすれば——、『二十一ボーゲン』誌にのったヘスの諸論文と、『独仏年誌』にのったエンゲルスの「国民経済学批判大綱」につきてしまふ……。」<sup>(11)</sup>

エンゲルスの「大綱」については、もはや言葉を費すまでもない。また当時のマルクスがいかに高くヴァイトリンクを評価していたかは、「論文『プロイセン国王と社会改革——プロイセン人』にたいする批判的論評」でのヴァイトリンクへ言及した箇所をみることによって、容易にこれを窺い知ることができる。また同じ箇所をとおして、われわれはかれがヴァイトリンクを評価するさいに念頭においていた著作が、主として『調和と自由の保証』であったことも推察できるであろう。<sup>(12)</sup>

さて、すでに引用した一文でマルクスがヘスとの関連において挙示した『二十一ボーゲン』誌とは、一八四三年七月に刊行されたベルヴェーク編輯の『スイスからの二十一ボーゲン』誌のことであって、ヘスはそれに(一)「社会主義と共産主義」、(二)「行為の哲学」、(三)「一つのそして完全な自由」の三つの論文を寄稿している。ただこれらの論文のうち、(一)と(二)の論文には「ヨーロッパの三頭政治の著者による」という署名が入っていてヘスが執筆者であること

は容易に察知されるのにたいして、(三)の論文は省略署名〔Strum〕になっているから、マルクスが『二十一ボーゲン』誌のヘスの論文に言及したさい、それが第三論文まで含めていったものであったか否かについては、なお慎重な検討を要するであろう。

同じ四四年『手稿』は、ヘスについては、さらに第三手稿で、「所持(Haben)という範疇については『二十一ボーゲン』誌上のヘス、を参照せよ」、と<sup>(14)</sup>いっている。そしてこの註を手がかりに、『二十一ボーゲン』誌のヘスとマルクスとの関係を追求する研究家は、今日ではすでに挙げたヘスの三つの論文の中でもとりわけ「行為の哲学」に関心を集中しつつある。<sup>(15)</sup>

ヘスとマルクスとの関係を追求するばあい、近年とくに注目されているヘスの論文に「貨幣的存在について」がある。たとえば、「貨幣的存在」のマルクスに与えた影響をとくに重くみる研究者の一人であるコルニユは、ヘスとマルクスとの思想的系譜関係を、(一)「人間の自己産出の手段としての労働の本質的役割に関する概念の形成」と(二)「人間の労働の疎外が資本主義体制の本質的メルクマールであるという見解の形成」の二点でとらえようとしているが、そのかれは(一)の問題の論証にさいしては、主としてヘスの論文「行為の哲学」を利用し、これに反して、(二)の問題の解明にさいしては「貨幣的存在」をひきあいに出している。<sup>(16)</sup>ところが、ヘスの後者の論文は一八四五年に公刊されたピュットマン編輯の『ライン年誌』にはじめて公表されたのだから、この論文によってヘスのパリ時代のマルクスへの影響を立証しようとするのは、一見、逆立ちしているかみえる。だがコルニユのばあい、その背後には「貨幣的存在」の執筆、公表の経緯に関するつぎのような考証がひそんで<sup>(17)</sup>いるのである。すなわち、かれは一九三一年にJ・

P・マイアーによって『ゲゼルシャフト』誌第八年号第二冊にはじめて公表されたヘスの手稿「パリのドットーレ・グラチアーノ、またの名はドクトル、アーノルト・ルーゲ」の中のつぎの一文に注目している。

その一節でヘスはつぎのようにいっている。「独仏年誌がパリで創刊されたとき、わたくしは同誌の企画者であるフレーベルとグラチアーノとにいて、すでに提供ずみの労作や、同誌のために執筆中の・それもほとんどできあがった労作とひきかえに前借した」。またかれは、脚註で後者の論文について敷衍して、「後者の中には論稿貨幣的存在についてもあった。その大半はすでに独仏年誌の編輯部に引き渡さずみであったが、グラチアーノの年誌が創刊後まもなく廃刊になったので、それから一年半もたってやっとピュットマンの年誌にのった」<sup>(18)</sup>。

もしヘスのこの証言にして信じうるとすれば、『独仏年誌』の編輯は事実上マルクスのひとり舞台であったこと<sup>(19)</sup>、またマルクスとヘスとの年来の交渉などから考えて、マルクスがヘスの「貨幣的存在」を原稿のまま読んでいたかもしれないことは十分に想像しうる。ヘスとマルクスとの思想的系譜についてのコルニエの解釈には大いに問題のあるところであり、わが国でも綿密な検討が進められつつあるが、<sup>(21)</sup>少なくとも右の文献史上の推定に関しては傾聴すべき点が蔵されているというべきである。

マルクスがつとにブルードンを高く評価していたことは、すでに本節でも引用した『ライン新聞』の論説や『独仏年誌』所収の「ルーゲ宛の手紙」からもうかがうことができる。そのさいかれの念頭にあったのが「財産とは何か」であったことは、パリ時代の『聖家族』のブルードン擁護の章（第四章の「4ブルードン」）や「リカードゥ評註」でのかれへの言及から容易に推定しうるが、それがいつどのようにして読まれたかについては、いまのわたくしには手がかりとなる資料がなく、すべては別の機会にゆだねるほかはない。<sup>(23)</sup>

註 (1) *Marx-Engels Werke*, Bd. 1, S. 108. 邦訳『一二四—一二五ページ』。

(2) Vgl. *MEGA*, Abt. 1, Bd. 1, Halbbd. 2, S. 118—136. なお『マルクス『経済学ノート』「訳者解説」一六〇—一六一ページを参照。

(3) Ein Briefwechsel von 1843, *Deutsch-Französische Jahrbücher*, herausg. von A. Ruge u. K. Marx, Lieferung 1—2, Paris 1844, S. 17—40. それは「マルクスのルーゲ宛の手紙を冒頭におき、以下「ルーゲよりマルクスへ」、「マルクスよりルーゲへ」、「バクーニンよりルーゲへ」、「ルーゲよりバクーニンへ」、「フォイエルバッハよりルーゲへ」、「ルーゲよりマルクスへ」という順に配列され、最後に再び「マルクスのルーゲ宛の手紙」がおかれている。

(4) Vgl., ebenda, S. 37. *Werke*, Bd. 1, S. 344. 邦訳『三八〇—三八一ページ』。

(5) 向坂逸郎『マルクス伝』一四三ページ。

(6) Vgl. *Marx-Engels Werke*, Bd. 2, S. 139. 邦訳『一三七ページ』。

(7) Vgl. K. Marx, *Manuskripte*, *MEGA*, Abt. 1, Bd. 3, S. 115. 邦訳『四七ページ』。

(8) Vgl. *Marx-Engels Werke*, Bb. 2, S. 88, 139, 199. 邦訳『八五—一三七、一九九ページ』。

(9) Vgl. *MEGA*, Abt. 1, Bd. 6, S. 611—612. なお『マルクス『経済学ノート』「訳者解説」二〇八—二一〇ページを参照。

(10) 五島茂『ロスマント・オウエン著作史』によつて知つて調べてみただけでも、『新世界観』の独訳(一八一七年刊)、『新道徳世界の書』の独訳(一八三八年?)、『二つの覚書』の仏訳(一八一九年刊)、『合理的社会制度の要論』の仏訳(一八三七年刊)、『ロクビックとオーエンとの間の公開講演』の仏訳(一八三七年刊)、『結婚についての講演』の仏訳(一八四一年刊)、『フラインドリとオーエンの間の公開講演』(一八四一年)等があったようであるから、マルクスが独訳もしくは仏訳をおしてオーエンの著作論文に直接に触れていたことは十分に考えうる。なお、サン・シモン、サン・シモン主義関係の文献との関連についても当然検討されるべきであるが、内容的にはともかく、形式的にマルクスの著作、論文からこれをつきとめることは困難なので、別の機会にゆずる。また、しばしば問題になったシュタインとの関係も、『現代フランスの社会主義と共産主義』の初版を見ることができなかつたので、遂に断念せざるをえなかつた。

(11) K. Marx, *Manuskripte*, *MEGA*, Abt. 1, Bd. 3, S. 33—34. 邦訳『二一ページ』。

(12) Vgl. *Marx-Engels Werke* Bd. 1, S. 404—405. 邦訳『四四—二二三ページ』。

マルクスのパリ時代の経済学研究に関する資料的覚書(重田)

- (13) Vgl. Moses Hess, *Philosophische und sozialistische Schriften*, 1837—1850, herausg. von A. Cornu u. W. Mönke, Berlin 1961, S. 507.
- (14) K. Marx, *Manuskripte, MEGA*, Abt. I, Bd. 3, S. 118. 邦訳「一五二ページ」。
- (15) たとえば「なきに述べた「所持という範疇については」云々の指示するヘスの論文を、青木文庫版邦訳者の三浦氏も、仏訳者ポティシエリも「行為の哲学」に求めておられる。三浦氏については青木文庫版邦訳一八七—一八ページの註一〇、「一」を、仏訳については九一—九二ページの註（国民文庫版二六〇—二六一ページにも収録）を参照せよ。両者ともに前記ヘス論文のほぼ同一箇所を指摘しているのも興味深々。
- (16) A. Cornu, *K. Marx und F. Engels*, Bd. 2, S. 120—122.
- (17) A. Cornu, a.a.O., Bd. 1, Berlin 1954, S. 518.
- (18) J. P. Mayer (herausg.), *Doktor Graziano oder Doktor Arnold Ruge in Paris*, Aus dem handschriftlichen Nachlaß von M. Heß, *Gesellschaft*, Bd. 1, 1931, S. 178. なおコレニドによって再びもちだされたマイアー編輯のヘスの遺稿の以上の部分は、山中隆次氏によって、氏の注目すべき論稿「ヘスとマルクス」（和歌山大学『経済理論』第六二号、六三号に所収）の中ですでに邦訳・紹介されている。
- (19) Vgl. F. Mehring, *Karl Marx, Gesammelte Schriften*, Bd. 3, Berlin 1962, S. 67—68. 栗原訳「八五—八六ページ」。
- (20) マルクスがヘスと知りあったのは「しばしばひきあいに出来る一九四一年九月二日付のヘスの「B・アウエルバッハ宛の手紙」——ここではマルクスがヘスに与えた深い印象が述べられている——によって、おそくとも四一年の秋であったことは明らかである。また、かれが、『ライン新聞』の二三七号（一八四二年五月十七日付）に発表した「中央集権問題をめぐってのドイツとフランス」はただちにマルクスの批判にあつたといわれる。また、ヘスは『独仏年誌』の発刊にさいしては、「パリ便り」という表題で、通信文風の論評四篇を寄せている。
- (21) この点については、山中隆次氏の前出（註（18））の論稿と畑孝一氏の論稿「モーゼス・ヘスにおける人間疎外について——ヘスとマルクスとの関係に関する一考察——」（『一橋論叢』第四十六巻第一号）および「オーギュスト・コルニユのヘス研究（コルニユ、メンケ編『哲学・社会主義著作集』の書評）」（『一橋研究』第八号）が注目に値する。とくに、山中氏の論稿は、コルニユの一九三四年の著作『モーゼス・ヘスと青年ヘーゲル派』にまでさかのぼってコルニユの所説を検討した

周到な研究であって、教えられる点が多い。

- (22) *Vgl. MEGA, Abt. I, Bd. 3, S. 494, 501.* 邦訳、四七—四八ページ、五〇—五一ページ。なお四八ページの訳註(1)をあわせて参照のこと。

- (23) なお、ついでに言っておけば、マルクスとブルードンとの間に直接の交渉が生じるのは、一般に四、四年の七月頃とされている(たとえば、M・E・L 研究所編岡崎・渡辺訳『マルクス年譜』三一ページ、大月版『マルクス・エンゲルス全集』第一巻付録二六ページ)が、コルニユの『マルクスとエンゲルス』第二巻は、ブルードンがパリに滞在したのは「一八四四年の二月から四月にかけてと、ついで一八四四年の九月から一八四五年の二月にかけて」(S. 65)であったといい、マルクスとかれとの間に密接な関係のあったのは「四四年から四五年にかけての秋と冬」(S. 68)であったとしている。

#### 附記

本稿の作成にさいしても、杉原四郎教授より終始温い御援助と懇切な御教示とを賜わった。また、シュルツ、ビュレ、ルーソン等の著作をみる事ができたのは、ひとえに大阪府立図書館天王寺分館長南謹三氏の特別の御配慮によるものである。以上附記して感謝の言葉としたい。